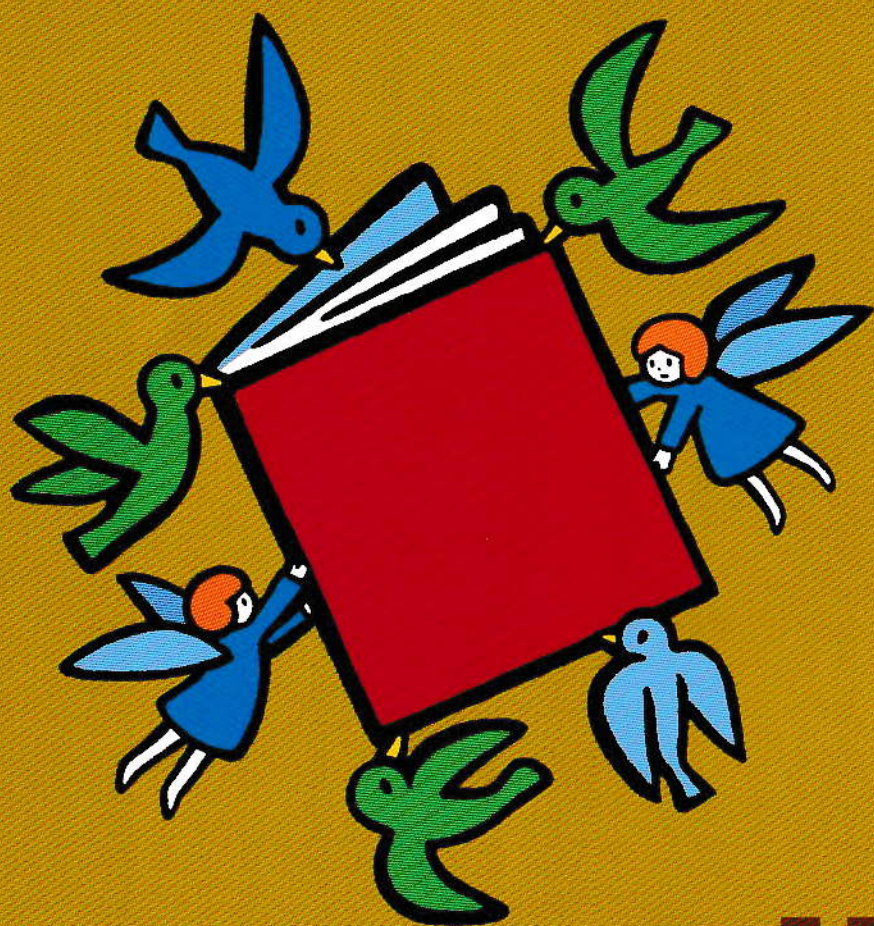


子どもの文化

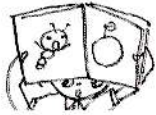
特集

絵本をとりまく環境



子どもの文化研究所

2024 **11**



特集▼1

絵本をとりまく
環境

絵本テーマの多様化

絵本をとりまく環境と

絵本の力

絵本に描かれる社会的テーマ

松本 猛

絵本・美術評論家・ちひろ美術館常任顧問・
横浜美術大学客員教授



戦争と平和を語る絵本

現在、このテーマの絵本は、日本はもとより世界でも数多く出版されて続けています。それは残念ながら現代も含めて戦争のない時代がないからです。次の世代を担う子どもたちに平和の大切さを語らねばならないと考える制作者が、毎年のようにこのテーマの絵本を出版し続けています。しかし、絵本は表現の手段ですから、戦争の必要性を説く絵本も制作できます。実際、戦争中には、「講談社の絵本」をはじめ戦意高揚のための絵本がたくさん制作されました。戦後、日本でこのテーマの絵本が出版されたのは基本的には1973年からです。その背景には、当時ベトナム戦争が苛烈を極め、多くの子どもたちが犠牲になっていたことがあります。世界中の人々がそれぞれの立場から反戦の声をあげる中で絵本の分野からも発信が始まりました。この年に出版された早乙女勝元の文章と田島征三の絵による『猫は生きています』（理論社）

日本の絵本界では1960年代に絵本表現の可能性を模索する様々な動きが生まれました。しかし、テーマは基本的に、昔話や童話、幼児の生活、教育に関連するものがほとんどで、子どもが関心を持つものに限られていました。1970年代に入るとそうしたテーマの縛りが少なくなりやすくなります。

その理由の一つは、作者（とくに画家）が絵本を自立した表現ジャンルとして認識し、様々なテーマを絵本で表現できると考えるようになったからです。別の理由としては、1970年代初めに始まる第二次ベビーブームに対応し、出版界が絵本に力を入れ、絵本の出版数自体を飛躍的に増やしたことが関係しています。幼児だけでなく年齢の高い子どもを対象とした絵本が増加し、テーマを広げる必要が生じます。その中で社会的事象や生き方を語る絵本が登場してきます。

は強いインパクトを社会に与えました。早乙女勝元は12歳の時、東京大空襲で九死に一生を得ます。田島征三も幼いころに大阪で機銃掃射にあい、命の危険にさらされたことがあります。早乙女勝元と田島征三の迫真の描写は東京大空襲の悲惨さをリアルに描き、ロングセラーの絵本となりました。同年に出版されたいわさきちひろの『戦火のなかの子どもたち』（岩崎書店）も現在まで読み継がれている絵本です。いわさきちひろもまた東京の空襲で家を焼かれ、炎のなかを逃げまどい川の水をかぶりながら一夜を明かした経験があります。どちらの絵本もベトナム戦争を意識して、戦争の実態を伝えねばならないという観点から誕生しました。

その後、原爆の悲惨さを伝える絵本が登場します。

1978年に『まちんと』（松谷みよ子 文 司修 絵 偕成社）、1980年には『ひろしまのピカ』（丸木俊 絵・文 小峰書店）が出版されます。1995年に出た『絵で読む 広島』の原爆』（那須正幹 文 西村繁男 絵 福音館書店）



は個人の体験や取材から制作された絵本とは異なり、歴史的背景から現代の核問題まで、科学的視点をもって原爆を解明する百科事典的要素を持った絵本です。1982年にイギリスで出版された『風が吹くとき』（レイモンド・ブリックス さくまゆみこ訳 あすなろ書房 1998）は日常生活の中に突然起こる核戦争の脅威を、ごく普通の夫婦が放射線におかされ、命を失っていく姿を描き、世界的にヒットします。核戦争という危機をはらんでいる現代では、このテーマが風化することはありません。

多くの戦争をテーマにした絵本がありますが、日本がアジアの国々を侵略し、膨大な被害をもたらした加害者という視点で描かれた作品はほとんどありませんでした。その中で2011年から出版が始まった「日・中・韓 平和絵本」シリーズは各国4名の作家が参加し三国で共同出版するという世界的にも稀有な試みでした。中国の作家による『京劇が消えた日』（姚紅 作 中由美子 訳 童心社 2011）、『火城 燃える町——1938』

（蔡皋（ツァイカオ）文・絵／翱子（アオズ）絵 中由美子 訳 童心社 2014）、『従軍慰安婦』をテーマにした韓国版の『花ばあば』（クオン・ユンドク絵・文 桑畑優香 訳 ころから株式会社 2018）などは被害を受けた国の視点から日本の戦争を描いた貴重な作品です。第二次世界大戦中のナチスによるユダヤ人虐殺を描いた絵本もありますが、『エリカ 奇跡のいのち』（ルース・バンダー・ジー作 ロベルト・インノチエンティ絵 柳田邦男 訳 講談社 2004）は綿密な調査のもとに制作されたリアルなドキュメンタリー風の創作絵本です。

戦争がなぜ起こるのかを視覚を通して子どもにも伝えようとする絵本もあります。

『サルビルサ』（スズキゴジ 架空社1996 初版はるぶ出版1991）は戦争の愚かさをユーモアたっぷりに、絵と意味を持たない文字の組み合わせで表現しています。『へいわとせんそう』（谷川俊太郎 文 Notitake 絵 ブロンズ新社 2019）は見開きの左ページに平和、右ページに戦争を、ピクトグラムを連想させるような単純化したモノクロームの線だけの



絵で対比させます。たとえば「へいわのほくせんそうのほく」「へいわのチチ せんそうのチチ」のようなテキストで視覚的な対比を繰り返し、ラストは「みかたのあさ てきのあさ」「みかたのあかちゃん てきのあかちゃん」というテキストにまったく同じ絵を見せ、戦争の意味を問いかけます。

直接的に戦争を描いた本ではありませんが長谷川義史の『ほくがラーメンたべてるとき』（長谷川義史 教育画劇 2007）は、同じ時に世界の子どもたちが何をしているのかを、ページをめくりながら感じられるように作られています。ラーメンを食べている少年から始まり、次第に貧困や児童労働も描かれ、最後には地面に倒れている子が現れて、再びラーメンを食べている少年の後ろ姿で終わります。

ここに取上げた絵本は、ほんの一部ですが、絵本が語る戦争と平和は、文字で書かれた書籍とは違い、視覚を通してこの問題を感じ、考えることができるので、子どもから大人まで、また違う言語の人にも届きやすい表

現といえます。

人権・差別をテーマにした絵本

近年特徴的なのは人権をテーマにした絵本が増えていることです。人間は平等でなければならぬことは、理論上ではだれも否定しません。しかし、現代社会においても人種、民族、男女、階級、貧富、年齢、障害などさまざまなカテゴリーのなかで差別が存在し、人権がないがしろにされることがあります。絵本がこの問題を積極的に取り上げるようになった理由は、差別意識は歴史のなかで大人社会が作り出したものなので、子どもの時から人権の大切さを知ってほしいという制作者側の強い思いがあるからでしょう。

人権問題を最初に絵本が取り上げたのは人種差別です。人種差別はアメリカ合衆国の黒人奴隷問題から広く社会に認識されます。

1950年代半ばにキング牧師らの活動から始まった公民権運動（1964年公民権法制定）のさなかに、『ゆきのひ』（エズラ・ジャック・キー



ツ 木島始 訳 偕成社 1969) が出版されま
す。これがアメリカではじめて黒人の子ども
を主人公にした絵本でした。多民族国家のア
メリカでは、現在、アフリカにルーツを持つ
人の文化を描く絵本だけでなく、極東からイ
ンドまでのアジア系、ヒスパニック系など多
様な文化の魅力と価値を描く絵本が出版され
るようになっていきます。

性差別の問題は、世界中で多くの問題を抱
えています。近年、自立した女性の活躍を描
く絵本が海外で続々と出版され、次々と翻訳
されています。

『せかいでさいしよにズボンをはいた女の
子』(キース ネグラー作 石井睦美 訳 光村教育図
書 2020) は、19世紀のアメリカ女性でズ
ボンをはいて何度も逮捕された人の伝記です
が「わたしは男性の服を着ているのではあり
ません。わたしはわたしの服を着ているので
す」と言い続けました。

『きょうりゅうレディ さいしよの女性古生
物学者』(メアリー・アニング マルタ・アルバレス・
ミゲルス まえざわあきえ 訳 出版ワークス 202

親と兄弟を、ページをめくるにしたがつて次
第にブタになっていくように描きます。文章
で書けば深刻な内容を、ユーモアあふれる絵
本にして、子どもがこの問題を自然に気づく
ように描いています。

日本では『ぼくのママはうんてんし』(おお
ともやすお さく 福音館書店 2012) が電車の
運転士の母親と看護師の父親の家庭を描いて
います。『しげるのかあちゃん』(城ノ内まっ子

作 大畑いくの 絵 岩崎書店 2012) は父親
の姿が全く感じられない絵本です。トラック
運転手の母親はシングルマザーかもしれませ
んが、何でもできるお母さんの姿が描かれま
す。直接ジェンダーの問題を掲げているわけ
ではありませんが『海のアトリエ』(堀川理万
子 偕成社 2021) は深いところに女性の自
立というテーマが潜んでいます。いやなこと
があつて学校に行けなくなった少女は一週間、
海辺に一人で住む女性画家のアトリエで暮ら
しますが、その生活の中で、自由や、生きる
喜びや、感じるこの大切さなどが静かに語
られます。

1) は、19世紀のイギリスで、女性が仕事を
することを認められていなかった時代から化
石ハンターとして活動し、苦難を乗り越え世
界が認める考古学者になった人の話です。「わ
たしは反対!」(デビー・リヴィ エリザベス・バ
ドリー 子どもの未来社 2022) は女性の権利
をはじめ、人権を守る戦いを続け、アメリカ
の最高裁判事として活躍した人の物語です。
女性の伝記絵本にはジェンダーによって分け
られていた職種の壁を乗り越えた女性の姿が
多くみられます。

どこにでもいる普通の人々の生活からこの
問題を語っている絵本も数多くあります。

1986年にアンソニー・ブラウンが発表
した『おんぶはこりこり』(藤本朝巳 訳 平凡
社 2005) は家事分担の方向性を示した絵
本です。この本では母親も仕事を持っている
にもかかわらず、父親も子どもも家事は一切
やりません。母親が家を出して、初めて家事
労働の大変さを理解し、母親が帰ってきてか
らは家事を分担して行うというストーリーで
す。アンソニー・ブラウンは家事をしない父

『ジュリアンはマーメイド』(ジェシカ・ラブ
横山和江 訳 サウザンブックス社) はニユー
ヨークを舞台に地下鉄で出会ったマーメイド
の衣装をまとった3人の女性を美しいと感じ、
自分もマーメイド姿に扮装する少年の話です。
この絵本はトランスジェンダーの人々をあた
たかく見つけています。LGBTQの人々も
長い間差別に苦しんできました。

障害をテーマにした絵本も数多く出版され
ています。障害といっても身体障害、知的障
害、精神障害(発達障害を含む)など一概に
は言えません。様々な障害を理解するための
絵本や、どのように向き合ったらいのかを
アドバイスする実用性を重視した絵本も少な
くありませんが、作品としてこのテーマを昇
華した絵本もあります。

このテーマで社会に衝撃を与えた最初の絵
本は1976年に出版された『はせがわくん
きらいや』(長谷川修平 復刊ドットコム2003)
でしょう。この絵本は1955年に起きた森
永ヒ素ミルク事件を題材にしています。作者
の長谷川修平はこの事件の被害者で、中毒に



よる障害が残った自らの子ども時代の経験を
私小説風絵本として描きました。

『わたし いややねん』(吉村敬子文・松下香住
絵 借成社 1980)は幼いころに脳性小児ま

ひと診断され、手足が不自由になった作者と、
作者の車椅子を押し続けた友人の画家が協力
して制作した絵本です。この絵本は「はせが
わくんきらいや」が切り開いた分野を別の角
度から表現しています。障害を持った作者の
本音の言葉と無機質な車椅子の対比のなか
で、社会が障害者とどう対峙しなければなら
ないかを考えさせる作品です。

『あつおのぼうけん』(田島征彦 吉村敬子 作
童心社1983)は田島征彦が『わたし いや
やねん』の作者である吉村敬子と組んで制作
した創作絵本です。『わたし いややねん』
はドキュメンタリーの要素が強い絵本ですが、
この絵本は、健常者にも通じる物語として成
立しています。その約30年後に田島征彦は
『ふしぎなともだち』(くもん出版 2014)を
発表します。この作品は作者が住む淡路島で
自閉症の青年とその同級生を取材し、4年の

歳月をかけ完成させました。ともに育ち、と
もに生きるということとは何かを問う絵本で
す。

**大人の読者をひきつける、生き方・思想を語
る絵本の登場**

佐野洋子の『100万回生きたねこ』(講談
社 1977)は大人の絵本読者を拡大した代
表的な作品です。この絵本は100万回死ん
で、100万回生き返った猫の話です。自己
愛に満ちた猫は、そのキャリアからたくさん
の猫に尊敬されますが、一匹の白い猫だけは
見向きもしません。猫はこの白猫に恋をして
たくさんの子どもに恵まれた家庭を持ちます。
そして白猫の死を嘆き悲しみ、やがて、自ら
も永遠の死を迎えます。

同じ年に翻訳出版され、大きな話題になっ
たのが『ぼくを探しに』(シルヴァスタイン 倉
橋出美子 訳 講談社)です。この絵本は、線で
描かれた円に切れ込みが入り、顔のように見
える形が地面を表す1本の線の上を転がって



いくだけの構成です。この絵本は、男性が理
想の女性を探し続け、ついに巡り合ったもの
の、やはり一人の生活を選んだとも読むこと
ができます。

こうした絵本は、人間とは何か、生きると
は何かを、寓意的に考えさせる作品で大人の
ための絵本の扉を開きました。

近年で注目されるのはオーストラリアの絵
本作家シヨーン・タンの絵本です。2006
年に出版された『アライバル』(日本では河出書
房新社から2011出版)は128ページに及ぶ
文字のない長編絵本ですが、世界中で注目さ
れました。この絵本は、文化も異なり、言葉
も通じない、ふしぎな国へ移民した人の生活
と心理を描いたファンタジーです。シヨー
ン・タンの父親は、中国系のオーストラリア
移民で、この絵本は作者自身が自己の存在の
意味を確認し、人間が生きていることの意味を考
える作品です。シヨーン・タンの絵本は『ア
ライバル』に限らず、自己表現として制作さ
れ、どれもが現代社会に対する深い思索が根
底にあります。

社会問題と生き方をテーマにしたいくつか
の分野の絵本を見ってきましたが、自然や地球
環境をテーマにした絵本は、科学絵本の役割
とも関連している極めて重要な分野の一つで
す。東日本大震災・原発事故をテーマにした
絵本にも深い内容を含んだ作品が多く、「死
と老い」という人間の根源的なテーマに踏み
込んだ絵本もたくさんあります。

本稿の枠では語りきれませんが、人間が生
きていくうえで避けて通れない重要なテーマ
が、今や絵本の中に次々と登場しています。
これは、絵本が文学やマンガや映画などと同
じように一つの表現ジャンルとして認知され
つつあるからです。アニメーションが子ども
のための文化から生まれ、大人をも巻き込ん
だ文化へ発展したように、絵本もその可能性
は十分にあるでしょう。もっとも現代絵本の
大半は、子どもがメインターゲットの商品と
いう性格もありますが、子どもにとっても
大切な社会的テーマを、大人が共感できる表
現として追求しているのが現状といえるで
しょう。